慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戴孚『広異記』七則
Sub Title	Seven stories of Guangyiji (広異記)
Author	溝部, 良恵(Mizobe, Yoshie)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.13 (2020.) ,p.221- 234
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20200331-0221

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戴孚『広異記』七則

溝部良恵訳

はじめに

筆者は、本誌前号掲載の「家族の元へ戻る鬼の話――『広異記』「薛万石」と「李覇」を中心に」（『慶應義塾大学日吉紀要　中国研究』第十二号　二〇一九年所収。以下前稿とする）という論考において、安史の乱（七五五―七六三）末期に、浙東台州（現江蘇省台州市）で起こった袁晁の乱の際のことを書き記したと思われる『広異記』「薛万石」とそれをもとに書かれたと思われる「李覇」の話の比較を行った。『広異記』「薛万石」は、袁晁の乱の際に起こったことについて、作者戴孚が、自ら聞き書きした話ではないかと推測し、『広異記』の話の中で、安史の乱、袁晁の乱などについて書かれた話を分析することで、従来問題とされてきた正史と『広異記』のような志怪風の書との関係を考えることができるのではないかと最後に提起した。

今回、上記の観点に基づいて、前掲論文の中で触れた話を中心に、『広異記』の中から安史の乱あるいは袁晁の

乱に関連すると思われる以下の七話を選び訳出した。

一.「慈心仙人」（巻三九・神仙）
二.「李惟燕」（巻一〇五・報応・金剛経）
三.「陳哲」（巻一〇五・報応・金剛経）
四.「豆盧栄」（巻二八〇・夢）
五.「李瑩」（巻三三六・鬼）
六.「李澣」（巻三三七・鬼）
七.「紫荋羯」（巻四〇三・宝・雑宝）

（題名は、『太平広記』のものである。また括弧内の巻数、分類は特に断りのない場合、いずれも『太平広記』のものを指す。）

テキストについて

『広異記』の原書二十巻は、北宋ではすでに失われていたと思われるが、三百条あまりの話が、『太平広記』に収められている。そのほかに、早くから清代に編纂された六巻抄本の存在が知られてきた。『太平広記』及び六巻抄本をもとにした方詩銘氏の編集による排印本『広異記』（中華書局、古小説叢刊、一九九二年）がある。

『太平広記』は、宋初において勅命によって編纂された宋初以前の野史、志怪、伝奇などを集めた類書であるが、

印刷されることはなく、宮中の秘書に版木が蔵された。明末、談愷により刻本が出版された。これが所謂談刻本であり、現在最も信頼される『太平広記』の排印本の一つである中華書局本の底本となっている刻本である。しかし談刻本自身も複数の刻本があることが知られており、またその他にも明代の野竹斎抄本、清代の陳鱣による校本が知られている。中華書局本は、これらの諸本を参考にしているが、十分にこれら諸本の異同が反映されているとは言えない部分もあった。また近年、台湾大学所蔵の孫潜による校本、談刻本より前の『太平広記』を参考にしたと考えられる李朝朝鮮の成任により刊行された『太平広記詳節』の存在が知られるようになり、張国風氏によりこれらの諸本を用い、校勘した『太平広記会校』(北京燕山出版社、二〇一一年)が刊行された。そこで本稿においては、この『太平広記会校』を底本とし、適宜中華書局本『広異記』を参照することとする。

袁晁の乱とは

袁晁の乱とは、宝応元年(七六二)に、台州(現浙江省台州市)の豪農、袁晁が起こした農民反乱である。江淮地方は、安史の乱に苦しむ唐王朝の重要な財源地区であり、それゆえ白著などをはじめとする過酷な税の取り立てが行われており、こうした混乱の最中に没落し、流民化する農民も多数いた。袁晁は、宝応元年に、浙東台州(現浙江省)でこれらの不満を持つ農民をまとめ、決起した。『旧唐書』によれば、宝勝と改元し、最大で二十万もの兵を率いて、九月には信州、十月には温州、明州を陥落するなど、十六の群邑を支配下に置いたという。さらに唐王朝を模倣し、公卿数十名を任命し、独立国家を樹立しようとしたが、翌年の三月には、朝廷から派遣された李弼光により、袁晁の軍は破れ、広徳二年(七六四)十一月には、袁晁も捕らえられ、誅殺された。この乱に関する資

料は、多くはないが、松本秀一氏によれば、期間は短かったものの、唐末、黄巣の乱に匹敵するほどの規模を持った大きな反乱であったという（「八世紀中葉頃の江淮の叛乱―袁晁の叛乱を中心として―」『北大史学』二、一九五四年所収）。まだ安史の乱が完全に収束していない中で起こったこの暴動は、唐王朝に大きな打撃を与え、乱の影響は、浙江地方に広範囲にわたり、これ以後、唐末に至るまで、この地方では、農民による反乱が繰り返され、不安定な地域となっていったという。

『広異記』の作者戴孚は、譙郡（現安徽省亳県）で、開元年間（七一三―七四一）の終わり頃に生まれたと考えられる。安史の乱勃発直後、至徳二年（七五七）の科挙に合格した後の経歴は、ほとんどわからないが、最後は饒州（現江西省上饒市）の参軍（地方の下級官吏）で生涯を終えた。『広異記』の中で、唯一戴孚自身が登場する「王法智」（巻三〇五）では、大暦六年（七七一）桐廬県（現浙江省杭州市）で仲間たちと若い神がかりの女性を介し、昔の人物と交信したことが書かれており、袁晁の乱が起こった浙江の辺りに居たことが考えられる。こうしたことから、今回訳出した話の多くは、実際に戴孚が袁晁の乱を経験した人々から聞き取りをした話あるいは、当時南方一帯で伝えられていた話が多いのではないかと思われる。

一．慈心仙人（巻三九・神仙）

広徳二年（七六四）、臨海県（現浙江省）の袁晁が永嘉（現浙江省）に攻め込んだ際、その船は、大風に遭い、東の方に数千里も流され、やがて青々と茂った山ととりどりに光り輝く城壁に囲まれたところに着いた。舵をめぐらせ、船を泊めると、瓦は瑠璃、壁は鼈甲でできた道観が見えてきた。中に入ってみると、しんとして、人の姿は

見えない。ただ、西域産の子犬が二十匹ほどいるだけである。食器はみな黄金でできており、豪華なものであった。また寝具も綺麗なもので、多くは、蜀産の錦でできていた。さらには金の牙城があり、そのまわりには、金屑がうず高く積もっていた。袁の一味は人の姿が見えないので、争って物を取り始めた。すると突然婦人が一人、金の牙城から出てきた。身長は、六尺余り、刺繍を施した錦の上着を着て、紫のスカートを穿いている。その婦人が賊に向かって「そなた達は、袁の一味ではないか。どうしてここに来たのじゃ。ここにある物は、お前たちのものではない。勝手にさわるでない」と言った。そして西域産の子犬たちの方を見ながら、「おまえたちは、これを犬と思っていたのだろうが、そうではない。龍なのだ。お前達が持ち去ろうとしている物を惜しんでいるのではない。ただ、龍の怒りに触れたら、お前達の船はあっという間に海に引き込まれ、死んでしまうのだ。一刻も早く返しなさい」と言った。袁の一味は、整列し、持ち出した物をもとの場所に戻した。そしてここはいったいどこなのでしょう、と尋ねた。婦人は、「ここは、鏡湖山慈山仙人の道場です。お前たちは、いい加減に袁晁の仲間に加わったようだが、あと十日もすれば、大きな禍があるだろうから、気をつけるのですよ」と言った。袁の一味は、また風にのって海岸に帰りたいと懇願した。それを聞き、婦人が振り返り、さっと手を動かすと、たちまち風が起こった。賊たちは、婦人に別れの挨拶をすると、帆を揚げて出発し、数日後に臨海に着いたが、砂で浅瀬ができ、船から降りることができず、官軍によって殺されてしまった。ただ六、七人の女達が生き延びることができただけだった。浙東押衙（儀仗、侍衛を司る武官）謝詮之は、その一人を下女として引き受けることとなった。曲葉という名のその下女が、自らこのことを語ったのである。

【余説】袁晁の軍がどのような動きをしたか、詳しい資料は残っていないが、先に記したように広徳二年には、袁

晁は捕えられた。この話は、こうした背景と関係を持ちながら、袁晁の一味に関する話として、広まった噂話の一つだったのではないだろうか。下女が語った話であるため、信憑性には欠けるかもしれないが、人々の袁晁の一味への恐れと興味が、背景にあるように思われる。

二、李惟燕（巻一〇五・報応・金剛経）

建徳県（現浙江省杭州市）の県令李惟燕は、若い頃から『金剛経』を唱えていた。天宝年間（七四二―七五六）の末頃、惟燕は余姚郡（現浙江省寧波市）の参軍となった。任期が終わり故郷に帰るため、船で北へ向かっている途中、五丈店を過ぎたところで、ちょうど、上虞江の堰が破れ、川の水が干上がってしまった。時は真夜中で、あたりには誰もいなかった。この道は、以前から窃盗が多いことで知られていた。惟燕の船には、呉の地方で作られた綾ぎぬが数百疋（一疋は、二反＝四丈＝約十二メートル）あったので、惟燕は、賊に取られはしないかと気が気ではなかった。そこで一振りの剣を持ちながら、船の先頭に出てお経を唱えた。三更（夜中の三時頃）を過ぎると、堤防の辺りに二つの明かりが近づいてくるのが見えた。惟燕が、村人が助けに来てくれたのかと思っていると、火は船の先から百歩（約二十メートル）ほどのところでぐるぐると回っている。惟燕は不思議に思い、ますます声を張り上げ、経を読み続けた。そして心の中で、「火がついたのは、『金剛教』のおかげに違いない」と思った。その時、堤防の中の水は尽きていたが、堤防の外に水がたまってきたので、惟燕は、「堤防が破れて水が入りますように」と心に念じた。夜中過ぎに、船頭がふいに水の流れる音を聞いて驚いて、「堤防が大分ゆるんだようです。なぜ決壊したのだろう」と言った。しばらくすると、船が浮かんでいるような気がしてきたが、果たして夜が明ける

と、川の水は一杯になっていた。船が立ち往生していたところに、大きさ数丈の穴があいたのだった。それで『金剛教』を唱えたおかげだということがわかったのだった。惟燕の弟の惟玉は、虔州（現江西省贛州市）の別駕（州の総務担当の次官。長史とも称された）に任じられた。兄が『金剛教』を読んで功徳があったのを見て、見習うようになっていた。後に、船に乗って、峡に出たことがあったが、急な流れに櫓が折れ、船が沈みそうになった。そこで精一杯経を念じた。すると一本の櫓が流されてくるのが見えた。それをつかみ、事なきを得た。それから一族の者は常に『金剛経』を読むようになった。安禄山の乱にあった時、草むらに伏せていると、賊がせまってきていた。靴があったら逃げることができるのに、と思っていると、何かが落ちてきて背中にあたった。なんと新しい靴だった。

【余説】『太平広記』では、巻一〇二から巻一三四までは、「報応」の分類となっている。そしてさらに「金剛教」（巻一〇二から巻一〇八）、「法華経」（巻一〇九）、「観音経」（巻一一〇から巻一一一）と経ごとに分類されている。このように報応譚は、所謂「釈氏輔教」の説として、仏教の功徳を広める一つの方法だったと思われ、話の展開に面白さなどが見られることは少ない。しかし一方で、当時の人々が珍しい話として、話し伝え、書き記されたものと考えられ、これらを通して、当時の人々の信仰、考え方などを知る手がかりとすることができるだろう。また李惟燕は、今回訳出した「七．紫茉羯」にも名前が見られ、戴孚が直接話を聞いた人々の一人だったのではないかと思われる。

三．陳哲（巻一〇五・報応・金剛経）

臨安（現江蘇省杭州市）の陳哲は、余杭（現浙江省杭州市）に住んでいた。陳哲は、修行に努めており、いつも『金剛経』を念じていた。広徳年間（七六三―七六四）の始め、武康（浙江省湖州市）出身の朱潭が反乱を起こし、余杭を占拠した。陳哲は、多くの財産を持っており、それらを船に移して、逃げようとしたところ、すぐに賊が追ってきた。陳哲は、この賊を官軍と勘違いして、「賊はどのくらいの近さにいるのか」と尋ねた。賊はその言葉を聞き、「このおいぼれ、我らをばかにするのか」と怒り、剣で刺そうとした。ところが、剣を一振りするごとに、直径五、六尺（約一メートル）の光の円が、陳哲の身体を覆うので、賊が刺そうとしても刺すことはできなかった。賊たちは驚いて、「この方は聖人に違いない、傷つけたら大変なことになるぞ」と言いながら、剣を捨てて去って行った。

四．豆盧栄（巻二八〇・夢）

上元（七六〇―七六一）の初め、温州（現江蘇省温州市）の別駕（州の総務担当の次官）、豆盧栄が亡くなった。豆盧栄の妻は、金河公主の娘であった。公主は、砕葉（中央アジア、イスイククリ湖西方のオアシス都市）に降嫁した。砕葉は唐の属国となり、その王がなくなると、公主も帰ってきた。栄が温州に赴任すると、公主もついていった。宝応（七六二）の初め、臨海の山賊袁晁が、台州を攻め、占領した。公主の娘は、夜、夢に一人の人を見た。

その人は、ざんばら髪に血を流しながら、「温州はもうすぐ戦乱になるから、早く逃げるのだ。さもなくば、必ずや禍を受けることとなるぞ」と言った。娘は目を覚まし、すぐに公主にそのことを伝えたが、「たかが夢に慌てるんじゃありません。信じられるものですか」と相手にしてもらえなかった。そこでもう一度寝床に入ると、娘はまた夢を見たが、今度は豆盧栄が出てきて「さっきのざんばら髪の男は、お父様であられるぞ。今は、あの世で将軍となられているのだ。浙東はまさに袁晁の手に落ちようとしているから、お前たちを逃がしたいと思われたのだ。早くお言葉に従うのだ。何も持たずに逃げるのだぞ」と言った。娘は、また公主にこの話をした。ちょうど、江東では米の値段が高騰していたが、温州だけはまだ安かった。また公主はある人に呉の綾ぎぬを数千疋預けており、それが惜しくて動こうとしなかった。少したって、娘の夢枕に父が立った。「浙東八州は、袁晁の手によって陥落した。お前の母が、早く逃げなければ、必ず大変な目にあうぞ」こう言うと、父は泣き出した。公主はそこでやっと栝州（現浙江省麗水市）に移った。栝州が陥落すると、着の身着のままで逃げ出すこととなった。父親が夢の中で言った通りであった。

【余説】金河公主は、交河公主ともいう。西突厥の河汗阿史那懐道の娘で、突騎施の河汗蘇禄に嫁いだ。この話で取り上げられているのは、まさに袁晁が温州を攻めた際のことであるが、前稿で取り上げた「薛万石」（巻三三七）と同じ頃の話と思われる。内容的な関連性はないが、「薛万石」においても、袁晁の反乱のため、米価が高騰していることに触れられており、袁晁の反乱を受け、当時の温州付近が混乱に陥っていたことが感じられる記述である。

五．李瑩（巻三三六・鬼）

寿昌（現浙江省杭州市）の県令の李瑩は、趙郡（現河北省邯鄲市）李氏出身であったが、まだ結婚していない十三番目の従妹がいた。至徳年間（七五六―七五八）の初め、親戚達とともに、南方へ行こうとしたが、亡くなり、呉地方の海塩（現浙江省嘉興市）の地で葬られたということだった。その親戚の岷の荘園は、済源（現河南省済源市）にあったが、妹がいて、そこから十里ほど離れたところに、一人で住んでいたため、安禄山の乱の際には、兄達と一緒に南に逃れることができなかったということだった。ところが、上元（七六〇―七六一）中、突然その妹が帰って来た。いったいどうしたのか、と聞くと、賊に連れ去られたという。受け答えは、しっかりしていたので、家族はそれ以上妹を問い詰めることはしなかった。姉は、この混乱の最中に何かあったのではないかと恐れ、とにかく近くの張家に嫁がせてしまおうということになった。四、五年がたって、子供も一人生まれた。とても聡明で、至らぬことはなかったが、いつも岷の家の一室に鍵をかけてこもっては、休んでいた。岷の家の土地の多くは、乱の最中に人々に奪われていたが、訴えてすべて取り戻していた。永泰（七六五―七六六）の頃になると、世の中も落ち着つきを取り戻し、岷や親戚たちも江東から都に入り、試験に参加し、終わると荘園に帰ってきた。兄達があと数百里で着こうかという頃、妹は荘園にいたが、ふいに女中に「お兄様たちが数日したら到着するから、私はちょっと張家の方へ行ってくるわね」と告げ、姉にも別れを言いに行った。「なんでそんなことがわかるの」と姉が言うと、「何度も夢に見たのです」と答えた。女中が送って行くと、途中で女中を帰らせた。女中が少し歩いて振り返って見ると、妹の姿はなくなっていた。女中は気味が悪くなった。二日ほどして、張家から、妹が亡くなった

との知らせが届いた。姉や妹や甥達が、ちょうど泣き終わったころ、兄達が着いたので、妹の葬式を行った。兄の岷は、「妹は、上元の頃に亡くなって、海塩に仮葬してきたのだ。どうやってここに来たというのだろう。鬼神のたぐいではないか」と言った。そこで、張家に行って見てみると、布団をあげても遺体は見当たらなかった。着ていたものや鏡を調べてみると、全て入棺の時に入れたものだった。妹の子供もまもなく亡くなった。

【余説】冒頭の文章では、李瑩の従妹が亡くなり、海塩で葬られたことが書いてあるが、その直後に李岷の話が始まる。亡くなったはずの妹が、家族には生きているかのようにふるまい、兄の帰宅によってそのことが露見するという内容であるが、冒頭で従妹は亡くなってしまっている、と書いてあり、わかりづらい。これは、当時李瑩が語った話をかなり忠実に記録したためではないだろうか。安禄山の乱の最中に起こった不思議な話の一つとして人々の間に伝えられていた話なのではないだろうか。最初に記述の混乱はみられるが、乱の最中に一人帰ってきた妹をとにかく嫁がせようとする姉の行動や、嫁いでからの妹の様子、乱後に世の中が再び落ち着きを取り戻す一家の様子が描かれており、戦乱が普通の人々の生活に与える影響をリアルに伝えている。

六．李澣（巻三三七・鬼）

河中（現山西省永済県）の少尹の李澣は、広徳二年（七六四）に亡くなった。初七日の法要を済ませると、突然、中門の辺りで、澣が一人で馬に乗って、大門を入ってくるのが見えた。召使たちが、再拝し、澣を支えて馬から下ろすと、澣は西側の部屋に入った。子供達は泣きながら、父親に挨拶をした。澣は、「生と死は定めなのだ。悲し

んでも、何にもならぬ。ただ亡き者の心を乱すだけだ」と言い、しばらく家のことをあれやこれやと指示した。澣は最初項玘の妹と結婚し、四人の子供を持った。最初の妻が亡くなったあと、河南の竇滔の娘を娶った。二番目の妻は、とても美しく、澣は妻をとても気に入っていた。しかし澣が戻ってきた時、妻は怖がり出てこなかったので、澣は妻を呼び、「生と死には境があるといっても、気持ちは変わるものではない。何を恐れているのだ。顔を見せておくれ。地下でそなたの泣き声を聞くたびに、悲しみにくれておったのだ。残念ながら、そなたの寿命も長くはない。まだ離れてから二年もたたないのだ。夫婦の絆は固いものだ。一緒にあの世へ行こうじゃないか。人は必ず死ぬものなのだ。一、二年長くなったからといって何も変わらないではないか」。妻が黙っていると、澣は、「よかろう。今はこれ以上言うまい。日を改めて、迎えをよこそう。別れは言わんぞ」と言った。そして四人の召し使いを呼び出し、「お前たちは昔から、妻に仕えていたのだから、一緒に来るがよい」と告げた。それから、妻の服を手に取り、自らいくつかの袋に分けて、四人の召し使いたちに渡し、「後でこれを持って、奥様に従ってくるように」と言った。また息子たちには、「私はもともとお前たちの母親と結婚していたが、あの世では、全く会うこともない。お前たちの母親と合葬をしてはならぬぞ。今の妻と合葬するのだ。もし言いつけを聞かなければ、お前達も命を落とすことになるぞ」と言い終えると、出て行った。召し使い達が、門まで送りに行くと、澣が馬に乗って走り去るのが見えた。東から西に曲がり姿が見えなくなった。後に、車馬が家までやってきたが、四人の召し使いにだけ見え、ほかの人には見えなかった。竇氏は支度をすると、前に澣が選んだ服を持ち、家族に別れを告げた。すると竇氏も召し使い達もその場でばったり倒れて息絶えた。

【余説】前稿において、「家族の元に戻る鬼」として、「李覇」（巻三三一）、「薛万石」（巻三三七）の話を分析した。

この話も亡くなった夫、父親が家族の元に戻り、様々な指示をし、最後には妻をあの世に連れて行くという話である。前稿においても指摘したが、この他にも『太平広記』巻三三七、三三八には、『広異記』からのものとは限らず、家族のもとに戻ってくる鬼の話が多数収録されている。他の小説集との比較なども今後に残された課題である。

七．紫茎羯（巻四〇三・宝）

乾元年間（七五八―七六〇）、唐王朝は長安と洛陽を取り戻したが、軍への食料は供給されぬままであった。監察御史（地方を巡察する監察官）の康雲間は、当時江淮度支（会計・経理をつかさどる経理官）であったが、江淮（現江西省鄱湖一帯）の行商人や農民に、五分の一ほど税を上乗せして徴収し、急場をしのごうと考えた。洪州（現江西省南昌市）は、江淮の間の大都会であった。康雲間は、参軍の李惟燕に洪州のことを任せた。一人の僧が、自分から百万の金を徴収してくれるようにと申し出ると、わきの下から、拳ほどの大きさの小瓶を一つ取り出した。それは何かと尋ねたが、はぐらかして答えず、「百万お納め下さい」と繰り返すばかりである。ともかく、李惟燕はお金を集めなければならなかったので、驚いたふりをしながら、「どうやって、これを手に入れたのですか。もしこれを売ったら、それ相応の値で売れることでしょう」と言った。それを見ていたペルシア人が、僧が言った値段で、買い取って行った。ペルシア人が、揚州に着くと、長史（州庁の属官）の鄧景山がその話を聞き、ペルシア人に尋ねた。ペルシア人は、「これは、紫茎羯というものです。手に入れたものは鬼神に守られるのです。火に入っても、焼かれることなく、水に入っても溺れることがありません。値のつけられるようなものではないのです」と答えた。そこで鄧はさらにペルシア人に、一万貫（一貫は、銅銭一千文）を納めさせた。ペルシア人は喜んでお

金を払い、恨むところもなかった。瓶の中には十二粒の珠があった。

【余説】李惟燕は、「二．李惟燕」にも出てきた。この話も李惟燕からの聞き書きと思われる。この話は、所謂胡人譚の一つで、胡人がさほど価値があるように見えないものを金に糸目をつけずに買うが、後ほど珍しい宝であることが明かされるという話である。しかしこの話の背景にも安史の乱後の政府の過酷な税の徴収の実態が垣間見られる。

おわりに

今回訳出したのは、『広異記』三百条の中では、ごく一部の話であるが、安史の乱、袁晁の乱前後の話に注目した。話の多くが、現在の浙江省杭州付近でのものである。冒頭に指摘したように、戴孚は、大暦六年（七七一）頃には杭州の辺りにいたと考えられ、こうした話を自ら収集していたのではないかと考えられる。内容は様々であるが、安史の乱や袁晁の乱に人々が翻弄され、混乱する様が感じられる。当時の人々にとっては、折々に振り返り、語られていた話だったのではないだろうか。まとまりのない文章に却って当時の人々が見聞きしたことをそのままに記録したリアリティが感じられる。

従来、唐代の小説を考える上で、『太平広記』の分類に沿って、神仙譚、胡人譚など分類ごとにその特徴を捉え、多くの成果があげられてきた。しかし今回のように、時代、場所などに沿って見てみると、中唐期、戦乱の狭間に生きた市井の人々の姿が生き生きと浮かび上がってくるように思われ、また異なる観点で、唐代小説の特徴を考えることができそうである。今後も引き続き、こうした話の翻訳を進め、このことについて考えていきたい。